

[研究ノート]

英国ジャコバイト紀行

浦田早苗

日本では『名誉革命』として知られている1688年英国で起こったクーデターによって王位を奪われた国王ジェームズ2世 (James II of England 1633-1701)、その血統の復位を願うものは、ジェームズのラテン語読みからジャコバイトと称される。ジャコバイトの起こした騒乱としては1715年の乱と1745年の乱が一般に知られているが、ジャコバイト軍の進撃したもの、未遂に終わったものも含めると実に50年間に18にも及ぶ脅威が英国を襲った。そして、それらの足跡は現在でも英国各地に残されているのである。

ロンドンから約200キロ北、車だとM1経由でA52を通り2時間少しのダービーシャーの都市ダービーにチャールズ2世の孫のチャールズ・エドワード・スチュアート (Charles Edward Stuart 1720-1788) の銅像が置かれている。1745年12月4日、チャールズ率いる6,500のジャコバイト軍が入城した250周年を記念して、1995年にロイヤルスチュアート協会 (The Royal Stuart Society) を中心に一般の人々の寄付によって建てられたものである。

1745年7月25日、わずか7名の従者と共にスコットランドに上陸したチャールズであったが、8月19日の



(ジェームズ2世)



(チャールズの騎馬像)



(チャールズ・エドワード)

旗揚げ後、彼のもとには続々とスコットランドのハイランド氏族が集まった。9月17日にはエディンバラに入城し、さらにそのまま南下を続け、各地で政府軍を撃破し遂にはダービーに達したのである。

挙兵からわずか4カ月足らずでロンドンを臨むという彼らの異常な進撃の早さはロンドンをパニックに落とし入れ、時の国王ジョージ2世 (George II of Great Britain 1683-1760) は故国ハノーヴァーへの逃避も考えていたという。しかし、チャールズには頼みとしたイングランドでの蜂起、援軍はなくジャコバイト軍も兵站線が伸びすぎた上に、村々での非協力的な態度に兵への食料の供給もままならないような状況下となってしまった。

ジャコバイト軍の実質指揮官であったマリ卿 (Lord George Murray 1694-1760) の「このまま風雪の冬を迎えるよりは戦線の立て直しに一時スコットランドに退くことにする」との判断を、チャールズはやむなく受け入れざるを得なかった。実はこのとき15,000のフランス軍がブローニュに集結し、英国上陸のタイミングを伺っていたのだが、そこに届いたのはチャールズ軍退却の報であった。フランス軍は出陣の出鼻を挫かれ、ジャコバイトと連携する機会が失われてしまった。

ダービーからA5132を南に走るとスワークストーン (Swarkestone) 村にでる。ここを流れるトレント (Trent) 川にかかるスワークストーン橋のたもとにある The Crewe and Harpur Arms というパブの中庭に、ジャコバイト進軍を記念する石碑が建てられている。

「1745年12月4日に達成されたチャー



(ジョージ2世)



(マリ卿)



(トレント川とスワークストーン橋、後ろにThe Crewe and Harpur Armsが見える)

ルズ王子の最南下点を記念する」と記された碑は創設250周年を記念してチャールズ・エドワード・スチュアート協会 (The Charles Edward Stuart Society) 等によって建立されたものである。

スワークストーンからA50を經由してM6で北上していくとマンチェスター近くにランカシャー州都プレストン(Preston)がある。ここを流れるリブル川(River Ribble)に架かるリブル橋両端が1715年の乱におけるイングランドでの戦場となった。

1688年の革命によって王位に就いたウィリアム3世(Willem van Oranje-Nassau, William III 1650-1702)、メアリ2世(Mary II 1662-1694)及びメアリの妹アン(Anne of Great Britain 1665-1714)には子供がなく、アンの崩御後英国の王位はジェームズ2世から5親等も離れたハノーヴァーの君主ジョージに受け継がれることとなった。1714年10月、英語も話せない54歳の「外国人」国王ジョージ1世(George I of Great Britain 1660-1727)が即位するとそれに反対する暴動が各地で勃発した。

この機にジェームズ2世の息子ジェームズ・エドワード (James Francis Edward Stuart 1688-1766) の亡命宮廷でクーデター—スコットランドとイングランドの2方面で同時に蜂起した後、フランス軍を率いるジェームズ・エドワードが英国に上陸し両者を東ねロンドンに進撃するというもの—が計画された。

しかし、計画実行の直前ジャコバイトを支援してきたフランス国王ルイ14世が崩御してしまう。こうした情勢にもかかわらず、勝利を焦った下院議員トマス・フォスター (Thomas Forster 1683-1738) は1715年10月に北イングランド、ワークウォースで挙兵した。



(ジャコバイト記念碑)



(ジョージ1世)



(トマス・フォスター)

さらにスコットランドのジャコバイト軍と連携が取れないまま、フォスターはイングランド南西部での蜂起を期待し無謀にも単独で軍を南下させてしまう。

11月12日リブル川を挟んで、フォスター軍と政府軍は一戦を交えた。死傷者は政府軍76に対しフォスター軍42と少数であったが、増援された政府軍に包囲されるとフォスターは1,500名の兵とともに14日



(リブル川)

投降する。その後フォスターは収監されたニューゲート刑務所から脱獄し、チャールズ・エドワードに終世仕えた。当時架かっていたリブル橋は改修されて残されていないが、リブル川は穏やかに流れている。

プレストンから北上するA6は、1745年のチャールズ軍スコットランド退去路にあたる。湖水地方への入り口として知られているペンリスの町手前3マイルに位置するクリフトン (Clifton) 村が、チャールズ軍とジョージ2世の3男であったカンバーランド公 (William Augustus, Duke of Cumberland 1721-1765) 率いる政府軍のイングランドにおける対戦の地であった。カンバーランド公爵



(カンバーランド公)

は後にジャコバイト兵の落武者狩りの過酷さから「屠殺者」と呼ばれ、スコットランドの人々の恨みをかった人物である。ダービーから退くジャコバイト軍に政府軍が追いつき、1745年12月15日戦闘が始まったが、戦い自体は月明かりの下でのゲリラ戦というものであった。結果は地の利を得、カンバーランド軍に100名の死傷者を与えたチャールズ軍の勝利に終わった。

クリフトン村の両端にはイングランドにおける最後の戦場を記念するプレートが掲げられている。

このクリフトン・ムアの戦い (Battle of Clifton Moor) で犠牲になった12名のジャコバイト達が、戦場端にあったオークの大木の下に埋葬された。ク



(クリフトン村の標識)



(Rebel Tree)

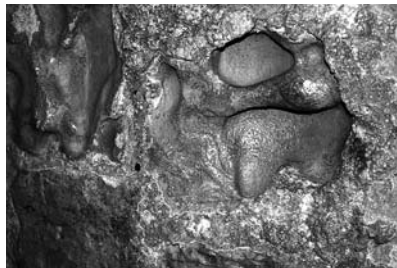


(Rebel Tree に守られたジャコバイト兵の墓石と墓標)



リフトン村にある大木はその後Rebel Tree (反逆者の木) と称されるが、その傍らにはノーサンブリアン・ジャコバイト協会 (The Northumbrian Jacobite Society) の献花に飾られた墓碑が静かに佇んでいた。

クリフトンからA6を北上するとカーライルの町に入る。ここにはスコットランド国境に近い要衝として1092年に建設されたカーライル城があり、その地下牢では1745年の乱で囚われた127名のジャコバイトを偲ぶことができる。全く光の入らない15畳程の地下牢に立錐の余地も無く押し込められた囚人たちには水も食料もほとんど与えられなかったため、喉の渇きを凌ぐため交代で壁から染み出る雨水を舐めたという。ジャコバイト達の唇で抉れてしまった壁跡 (lick stone) や、彼らが壁に刻んだ跡が残されている。審理に至る前に牢獄で2名の死者を出し、残された囚人も全て処刑された。スコットランドの人々に愛されている「ロッホ・ローモンド (The Bonnie Banks O'Loch Lomond)」の詩は処刑の前夜に若きジャコバイトがこの牢獄で恋人を慕って作ったといわれている。



カーライルからA74を北上してスコットランドに入り、A701でエディンバラの街に至ると、エディンバラ

(ジャコバイトによって舐め削られた lick stone)



(カーライル城に吊るされるジャコバイト)

城の雄姿が目飛び込んでくる。
1745年8月19日シール湖畔グレン
フィナンで旗挙げしたチャール
ズは進撃を続け、政府軍駐留の
フォート・ウィリアム、フォ
ート・オーガスタスを迂回し、ハ
イランド一揆鎮圧を目的に築かれ
たコリヤリック峠道を逆上って



(エディンバラ城)

いった。さらにパース、スターリングを経ながらその間に軍勢を増加させ、
9月17日無血のうちにエディンバラ入城を果たすのである。

チャールズはエディンバラのホルルド・ハウスに
おいて父ジェームズ・エドワードをスコットランド及
びイングランド国王ジェームズ3世である旨の宣言を
おこなったのである。さらに9月21日エディンバラ近
郊プレストンパンズ (Prestonpans) においてスコット
ランド守備軍総司令官コーブ將軍率いる政府軍を壊滅
させ、スコットランドに橋頭堡を築いたのであった。



(ジェームス・エドワード)

後に英国国歌となる 'God Save The King (Queen)'
「神よ我らが国王を救いたまえ」がロンドンの王立ド



(1745年10月15日The Gentleman's Magazineに掲載された楽譜)

ルリー・レーン劇場において初めて演奏されたのはまさにこの時、ジャコバイトの脅威が現実となった1745年9月のことであった。この歌はその後、「反逆せしスコットランド」という歌詞を含む第6節を除いてジャコバイト達によっても歌い継がれたという。

プレストンパンズ村の近くA198沿いに1745年の戦いを記念する碑が建っており、また近くの小山からは当時の戦場跡を臨むことができる。朝靄を利用し政府軍の背後に回り込むというハイランダーの奇襲は戦闘経験の少ない政府スコットランド軍をパニックに落とし入れ、数百名の死傷者と1,500名もの捕虜を出した。ジャコバイト軍の死傷者は100名にも満たなかったという大勝利であった。このとき手に入れた5,000ポンドの資金と武器はその後のチャールズ軍ダービー進撃を可能にしたのである。



(プレストンパンズの戦いの記念碑)

エディンバラからM9でグラスゴーに向かい、A803に入るとファルカークの町に至る。ここはダービーからスコットランドに引き上げたチャールズ軍が1746年1月17日にホーリー将軍 (Henry Hawley 1679-1759) 率いる政府軍を打ち破った地である。ファルカークの戦いで政府軍は350名の死傷者と300名の捕虜を出したのに対し、ジャコバイト軍の死者は50名足らずであった。

実は1745年の乱でジャコバイト軍は、カロデンの最終決戦まで負け知らずであった。画家デビッド・モリアの「カロデンの戦い」に描かれているように



(プレストンパンズの野。左図は当時の戦陣を表したもの。矢印の示すように、チャールズ軍は狭い水路を利用して政府軍の背後に回り込むという奇襲戦法をとった)

ジャコバイトが剣、斧、大鎌で政府軍のマスケット銃に対抗していたわけではない。2丁の単発銃を腰につけ、マスケット銃を肩に担いだうえで剣と楯を持つのがジャコバイトの標準装備であり、これはマスケット銃と剣しか持たない政府軍の装備を



(デヴッド・モリア作 Battle of Culloden)

凌ぎ、その上で凄まじい銃弾の後に奇声をあげて突進してくるハイランダーの姿に怯え降伏する兵も多かった。カロデンの戦いで政府軍の戦利品では銃器は剣の4倍もあったということである。

ファルカークの郊外にあるカレンダーパークに佇むカレンダー・ハウス (Callendar House) は決戦の前に城主レディ・アンがチャールズを厚くもてなした城である。ダービー撤退以来チャールズは投げやりな生活を送り、敗走中にもかかわらず、この城でも舞踏と飲酒に興じたという。



(カレンダー・ハウス)

レディ・アンの夫キルマノック伯爵 (William Boyd, 4th Earl of Kilmarnock 1704-1746) は1745年の乱以前政府側の立場で官職にも就いていたが、乱が勃

発するとチャールズ軍に投じ、ジャコバイト軍の将軍の一人としてファルカークの戦いとカロデンの戦いに従軍したが、カロデンの戦いの後捕えられ、1746年8月ロンドン塔タワーヒルで断頭刑に処せられた。



(キルマノック伯爵)

エディンバラからパースに抜けるM90から少し入るとオチル・ヒルズ (Ochil Hills) という高地がある。ジャコバイトの進軍を宿のシンボルとするシェリフミュア・イン (Sheriffmuir inn) という宿屋の近くに1715年の乱最大の決戦場跡があり、そこにそれを示す碑が1745年協会 (The 1745 Association) によって建立されている。1715年9月スコットランド・ブレマーにおいて挙兵したマー伯 (John Erskine, 6th Earl of Mar 1675-1732) が11月に政府軍と対戦し、663名もの損害を与えた記念碑である。



(シェリフミュア・インの標識とシェリフミュアの碑)

この大勝利にも拘らずマー伯軍は進撃できなかつた。急激な軍勢の増加に兵站が追いつかず、マー伯はジェームズ2世の軍資金を待つしか術は無かったのである。このときジェームズ2世は1715年12月にスコットランド上陸を果たしたが、軍資金を積んだ船がグンディの砂州で座礁転覆してしまう。最盛期には12,000を数えたマー伯軍は給与どころか食料の配給もままならなくなり、自然解体していった。ジェームズは翌



(マー伯爵)

1716年2月フランスに引き上げ、かくして1715年の乱は終結するのであった。

M90からA93を北上すると、1715年9月にマー伯爵が拳兵したブレーマー城(Bremer Castle)がある。マー伯は政府側であるふりをし、ジョージ1世に忠誠の誓いをしておきながらこの城で反乱の準備を整えていった。1628年に建造された城は1715年政府軍によって破壊されたが、1748年に再建され2006年から修復がはじまり、2008年から一般公開されている。



(ブレーマー城)

さらにA93からA97を北上すると、12世紀に建造が始まったマー伯一族の居城、1715年の乱で破壊されたキルドラミー城(Kildrummy Castle) 廃墟がある。かつてはスコットランドで最も優雅な城のひとつといわれた城跡は兵どもの夢の跡を感じさせる。



(キルドラミー城跡)

A97からA96に入って北東に進むと、1745年の乱最大にして最後の決戦場カロデンに至る。戦場はThe Culloden Battlefield Memorial Projectによって保存され、入り口にはビジターセンターがあり、当時の武器の展示や戦いの様子を映像等で紹介している。



(Culloden Battlefield Visitor Centre内の展示物)

1745年の乱最大のミステリーがこの1746年4月16日におこなわれたカロデンの戦いである。1745年の乱ではここまでジャコバイト軍は連戦連勝であった。前述したように武装に勝っていたこともあるが、戦いの多くが決戦場を持たない奇襲戦法であったことがその最大の理由であった。実はこの時

いくつかの選択肢がチャールズに残されていた。まだ新たな氏族がハイランド各地から駆けつけていた状況から、防備の十分なインヴァネスにこもり援軍を待つという戦術、切りたつた断崖に囲まれ騎兵・砲兵戦に適さないネルン川南岸を戦場に変更する戦法、全軍



（1746年に破壊され1836年に再建されたインヴァネス城）

を一旦解体して氏族ごとにゲリラ戦でカンバーランド軍にあたるという戦略、いずれもマリ卿の提案したものでそれぞれに勝機を持つものであった。

しかし、チャールズはこれらをすべてを退け、カンバーランドとの決戦に臨んでいる。3月25日に15,000ポンド（約1億2,000万円）の金貨と最新の銃機器を装備したフランス軍一個大隊を載せた小型砲艦プリンス・チャールズ号がフランスから急派される途中政府軍に拿捕されたことにより、ジャコバイト軍の士気を奪ったことによるのかもしれないが、それにしても大砲や騎兵に都合のよい平坦なカロデンは、砲兵戦に馴染みの薄いハイランダーにとって戦闘をするのには最悪な地であった。

カロデンを視察したカンバーランドは翌日に戦闘をひかえながら地の利ありとして、4月15日には自らの25歳の誕生日を盛大に祝ったというから、チャールズはカンバーランドのこの油断を誘ったのかもしれない。



（カロデンの決戦場となった泥濘地）

その15日の夜、チャールズの提案した全軍の兵によるカンバーランド軍の野営地への夜襲がもう少し早く実行されていたならば、銃の使えない闇夜で剣の技に優るハイランダーに十分勝機があったであろう。しかし、この計画は案内役のマッキントッシュ氏族の不手際もあって、敵陣三キロの地点で夜明けを迎えマリ卿はやむなく軍をひき返せざるを得なかったのである。



(Luke Sullivan画 カロデンの戦い)

4月16日午前11時に対峙した両軍であったが、カンバーランドが休養十分な6,400の歩兵と2,400の騎兵を擁したのに対し、チャールズのもとには前日の配給がビスケット一枚で夜間ぬかるんだ泥炭地を無為に歩き回され、ほとんど一睡もしていない疲弊した5,000の兵しか残っていなかった。カンバーランド軍の10門の3ポンド砲が砲兵戦の経験がほとんどないチャールズ軍の frontline に、また6門の白砲が後方に向け火を吹いたとき、勝敗はすでに決していた。砲音が止むと、銃や剣、斧を振りまわすハイランダーに、騎兵を先頭に葡萄弾(9つの玉が飛び散る散弾)や新型のマスケット銃(ライフルの前身)からの銃弾が雨霰のように降り注いだ。戦闘は小一時間ほどで終了し、チャールズはなす術もなく戦いの地を後にするしかなかった。戦場跡には大きな慰霊碑と、氏族ごとの墓跡がいくつも建てられている。



(ジャコバイトの慰霊碑)



(Maclean 氏族の墓跡)

A9から一旦A9を南下し、B970に入ると、小高い丘の上にリーヴェン・バラックス (Ruthven Barracks) の廃墟が見えてくる。ここにはもともとリーヴェン城があったのだが、その城は1689年にジャコバイトのダンディ子爵 (John Graham, 1st Viscount of Dundee 1648-1689) によって破壊され、1719年その城跡にジャコバイトの脅威に備える為の政府軍兵舎が再建される。しかし、その後1746年2月ジャコバイトの手に渡り、カロデンの戦いに生き延びた3,000名のジャコバイトが再起を期して集まったが、チャールズは軍の解散をここで発する。1746年ジャコバイトによって火が放たれたが、外観は比較的状态のよいまま残っている。



(ダンディ子爵)



(リーヴェン・バラックス)

A9でインヴァネスに戻り、A82に入るとネス湖に出会う。ここに1692年ジャコバイトの手に渡らないように政府軍によって破壊されたアーカート城 (Urquhart Castle) がある。以前は朽ち果て加減がネッシー伝説のネス湖畔に美しく映えていたが、近年ビジターセンターが整備され風情がなくなってしまった。



(ネス湖畔に佇むアーカート城)

A82をそのまま下ると、インベギャラリ城 (Invergarry Castle) に至る。マクドナルド家が1640年に建造し、ピューリタン革命中破壊されたが、1665年に再建された城であ



(インベギャラリ城)

る。チャールズは1745年グレンフィナンで挙兵した後この城に滞在し、また、カロデンでの敗北の後にも立ち寄っている。城は1746年にカンバーランド公によって破壊され、現在では廃墟と化している。

A82からA87に入り東に進んでいくとロッホ・ドウィチ (Loch Duich) の水面に映えるイーリン・ドナン城 (Eilean Donan Castle) が見えてくる。この城は1719年のジャコバイトの乱の舞台となった。

1718年に始まった英西戦争ではスペインが英国内に騒乱を起こす目的で、ジャコバイトを全面的に援助した。イングランドではオーモンド公 (James Butler, 2nd Duke of Ormonde 1665-1745) が、スコットランドではマリシャル伯の次男エドワード・キース (James Francis Edward Keith 1696-1758) が軍を率い、イングランドとスコットランドの2方面からロンドンに進攻するこの計画では、オーモンド公には5,000の歩兵と1,000の騎兵、大砲10門に15,000の銃器が、マリシャル伯にはスペイン軍6個中隊と2,000の銃器がスペインのアルベローニ枢機卿 (Giulio Alberoni 1664-1752) によって用意された。

1719年3月スペインのカディス港を出帆したオーモンド軍は、この季節としては異例な激しい嵐に遭遇してケープ・フィニステル沖で壊滅してしまう。一方キース軍はスコットランドに上陸し陣を張ったのがこのロッホ・ドウィチ湖畔のイーリン・ドナン城であった。

城はヴァイキング防衛のた



(オーモンド公)



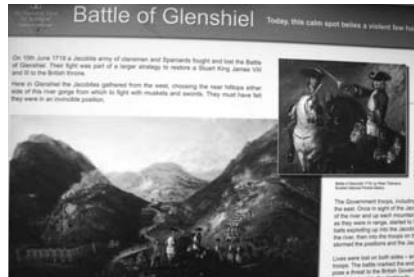
(エドワード・キース)



(アルベローニ枢機卿)



(イーリン・ドナン城)



（グレンシールの野と碑に掲げられた解説）

め13世紀に建造されたものであったが、1719年5月、立て籠もったキース軍壊滅のため3隻の政府軍艦による砲撃によりこの城は破壊され、以降廃城となってしまう。本来の城主であるマクロー（MacRae）一族によって、1912年から20年の歳月をかけ修復され、現在では一般公開されている。

イーリン・ドナン城から程近いA87沿いに1719年の乱の決戦場、グレンシール（Glenshiel）がある。城を追われたキース軍のもとには、キャメロン、マッグレーガー、マッケンジーといったハイランドの氏族から軍勢が駆け付けたが、1,000に満たないうちに政府軍と戦いに臨むことになった。6月10日グレンシールで相まみえた軍勢であるが、ワイトマン將軍率いる政府軍は900の歩兵120の竜騎兵、4門の迫撃砲小隊からなり、軍備の点でジャコバイト軍を圧倒していた。戦いは3時間ほどで決着がつき、ジャコバイト軍は政府軍に鎮圧されてしまい、1719年の乱は終結する。グレンシールの決戦場には、スコットランド・ナショナル・トラスト（The National Trust for Scotland）によって記念碑が据えられている。

A87をそのまま進むとスカイ島に入るが、さらにA850を北上するとダンベガン城に至る。カロデンの敗北後チャールズ・エドワードには3万ポンド（約2億4千万円）の懸賞金をつけられたが、彼はスコットランドの人々に助けられ、半年近くの逃避行の末、フランスに戻る。スカイ島ではマクドナルド家の姫フローラ（Flora



（フローラ・マクドナルド）

MacDonald 1722-1790) がチャールズを女装させ、自分の使用人とし逃亡の助けをした。

スカイ島での別れの日、チャールズは自らの髪を一房切りフローラに渡し再会を誓うが、チャールズがスコットランドの土を踏むことは2度となかった。フローラは一時ロンドン塔に収監されるが後に赦され、アメリカに渡ったが晩年になってスコットランドに帰郷が叶う。ダンベガン城にはフローラに手渡されたチャールズの巻き毛とベストが展示されている。

スカイ島をA87で離れてA82を経由しA830を東に進むとグレンフィンに至る。1745年7月25日小型フ

リゲート艦ラ・デュチュイエ号からスコットランドに上陸したチャールズであったが、数千の銃器と軍資金、兵士を積んだ大型軍艦エリザベス号は英国軍艦ライオン号との戦闘で破損し、フランスに引き上げざるを得なかった。それでもチャールズがハイランドの族長に挙兵を願ったところマクドナルド、キャメロン、マクドネルなど続々とハイランダーが集まり、8月19日ついにここグレンフィンでハノーヴァ朝打倒の旗揚げをしたのである。これを記念した石造の塔が1815年アレキサンダー・マクドナルドによって建立され、一般公開されている。

A830を更に進むと間もなく王子の記念碑と呼ばれる石碑が見えてくる。この碑が建つロッホ・ナン・アムはチャールズが1745年7月25年7名の従者ととともに上陸した地であり、またカロデンの敗北後の逃避の末1746年9月20日にフランス船Le Prince Conti号に乗り込みスコットランドを後にした場所



(ダンベガン城)



(ロッホ・シールを背景に建つ記念碑)



（王子の記念碑：チャールズのフランスへの旅立ちが記されている）

でもある。これを記念して1956年に45年協会によって碑が建立された。

チャールズは無事にフランスにたどり着くが、残されたジャコバイトに対する弾圧は過酷なものであった。拘束された者3,500名の内バルメリノ卿、キルマルノック伯ら4名の貴族がロンドン塔タワーヒルで断頭刑を受けたのをはじめとして、絞首刑や四つ裂き刑、溺死に処せられた者は数百名に及び、全ての財産を奪われたうえ新大陸に追放された一族郎党も多く、最終的に1745年の乱を機にアメリカに渡ったハイランダーは数万人にも及んだとされる。「武装解除法」(The Act of Proscription 1746)が制定されハイランドの武器が取り上げられ、バグパイプ(戦場での武具とみなされた)をはじめとするハイランダー特有のものがことごとく禁止され、タータンチェック、キルトなどを身につけることも禁じられた。さらに1746年「世襲的裁判権廃止法」(The Heritable Jurisdictions Act 1746)によってスコットランドの氏族制は解体され、ハイランドの族長は単なる貧しい地主に成り下がってしまい、スコットランドにおけるスチュアート朝再興のための蜂起は2度と叶わないのである。

失意のチャールズは、次第に飲酒と放蕩に明け暮れ、周りにいたジャコバイトが一人またひとりと彼のもとから離れていった。1772年42歳のときストルバーク王女ルイーゼ(Princess Louise of Stolberg-Gedern 1752-1824)と結婚したが、二人の間に子供はできず、アルコールと放



（晩年のチャールズ）

蕩で身を持ち崩したチャールズは、1788年ローマで寂しく死去した。

インヴァネス城の正面に建てられたフローラ・マクドナルドの像はスコットランドに戻ると言うチャールズの言葉を信じ、今でも悲しげにフランスを仰ぎ見ている。



(インヴァネス城に建つフローラ・マクドナルド像)

